



第52号

さらしな里

友の会だより



2025・春

冠着山仙石登山口に 新たな御神木



冠着山の仙石登山口に、古くから地域住民の信仰と集いの場所として親しまれている山の神広場があります。その一角に御神木とされる推定樹齢300年の赤松がその雄姿を誇っていました。それが十数年前から枝先から枯れがだんだん目立つようになり、その後、樹全体に広がり大枝が折れ落下する状態となりました。

近くには電線が通り、車も行き来する道路もあり、これ以上放置すれば倒木により大きな事故につながる恐れが出てきました。そこで仙石区としては伐採することを決め、経費を含めその対応を検討しました。幸いに市役所からの大きな援助をいただくこととなり、令和5年7月5日、伐採作業が行われました。

切り口の年輪を数え、樹齢を確認しようとはしましたが、中心部も腐敗が進んでおり出来ませんでした。一方、隣りに二代目として成長していた赤松も枯れてしまい惜しまれつつ伐採となりました。後継樹は周囲森林環境を踏まえ、樺の木を植えることとしました。また神様を祭る石の祠もかなり劣化が進んでおり、亀裂、剥離が目立っていたので原形を保つべく修繕を施しました。令和5年11月5日、新しい御神木の植樹と祠の設置を行いました。昨今獣害が各地で見られるため、幼少期の御神木を保護するため、木を硬質網で囲い、その対策としました。区議員全員が神聖な気持ちでこれらの作業を行い、最後に御神木の順調な生育を祈り、祭事を執り行いました。今後、樺の木が大きく成長し、末永く地域住民を見守ってくれることを願っています。

(仙石区・金井宗夫)



伝説の "さらどん" 再び

令和6年10月27日、気持ちいい秋晴れの中、第30回さらしなの里縄文まつりが開催されました。会員のみならずのお力と更級小学校のご協力で大勢に会場いただくことができました。

コロナ禍の終息後、規模を縮小して開催した第29回の後の第30回をどのようにするか、実行委員会の命題でした。活発な意見が交わされ、豊穣儀礼を核に地域の人たちが今後も積極的に関わるまつりとするのを確認しました。準備を進める中で私は、資料館の荷解室で「さらどん」を発見しました。手作りと聞いていたあの「さらどん」でした。せっかくなので、登場しよ



(前資料館学芸係長・宮澤久美)

う！と思っても身に着け方がわかりません。制作に関わった会員の手を借りて当日なんとか、さらしなの里歴史資料館のマスケット「さらどん」に変身することができました。いきなりの登場でしたが、ハイトッチをしてくれた小学生が多くいてうれしかったです。さつまいもが大きく実り、無事に当日を迎えられ、ケガ人も無く終了することができました。更級小児童は、芸能村出演だけでなくアナウンスも担当するなど運営の手伝いもしてくれました。児童の感想はまとめて資料館ロビーに置いてありますので、お読みください。

一年間お世話になりました。温かく受け入れてくださり感謝申し上げます。

縄文村の姿を明らかにした人たち 大橋静雄さんが回想記



機を感じた大橋さんが高校生のとき（今から65年近く前）、研究者らに相談し、正式な発掘調査につながったそうです。友の会縄文まつりの原点です。「とぐら」49号はさらしなの里歴史資料館と戸倉図書館で所蔵しています。

上の写真は、1963年に行われた最初の発掘調査メンバー。大橋さんは最前列左から2人目です。

さらしなの里友の会文化部長の大橋静雄さんが、戸倉史談会機関誌「とぐら」最新49号に、さらしなの里の縄文時代を明らかにした「幅田遺跡発掘回想記」（全10ページ）を寄稿しました。

「幅田」はさらしなの里古代体験パークの南側に広がる地籍名で、この地の発掘調査が成果が、さらしなの里歴史資料館の建設にもつながりました。

回想記によると、江戸から明治、昭和にかけて幅田地籍の農地の開拓開墾に伴い、出てきたたくさん土器片が「ガラクタ」として捨てられていました。危



『清まりの山』『再生の山』冠着



修験の行者たちが修行の証として児抱岩に納めた碑伝。この大岩が大昔から皆に大切に信仰されていることを知ってほしい。この御岩にみんなで（クライマーさんも一緒に）注連縄を巻くことが私の目標の1つ

令和7年のはじめ、冠着山へ年頭のお参り登山に行ってきた。年々降雪量は減っています。その日は冬山らしく雪が降り積もっていました。林道の途中までは車で行かれましたが、あとは歩いて登りました。歩き始めてほどなくして不動滝に着きました。滝は白く凍っていて、その美しさに心を洗われ、透き間を流れる水で身を清め、澄んだ空気の中白い雪道を独り進みました。しばらく歩く中、動物の痕跡を

見つけてたくましさを感じたり、経年変化によって、独特の雰囲気。森に立つ展望台が、どこか寂しさを発するのを感じながら、坊城平キャンプ場までやってきました。

キャンプ場は一面真っ白く、聞こえてくるのは風と木々の揺れる

音だけで、歩いてきた体の疲れを清々しく癒してくれました。キャンプ場の鳥居をくぐり、雪の帽子を被った冠着十三仏の横を通りながら、森の間から善光寺平を眺めて児抱岩の所までたどり着きました。

児抱岩は昔から「神仏が宿るお

令和7年 年頭登山

仙石区出身 工藤修

岩」として郷土の人たちに大切に守られてきました。ですが、とても残念なことに、数十年前からロッククライミング用の金具が打ち込まれてしまい、痛々しく泣いているように見えました。

今後訪れる皆さんと共に岩を大切にしていきたいと祈りを捧げた後、鎖場も登山道も雪に埋もれてしまった場所を何とか通り抜けて山頂の神社に到着しました。

やっとの思いで辿り着いた山頂は、温かな陽が差し白くキラキラと輝いていました。

神社でお祈りをし、大好きな「天狗のブナ」に挨拶とハグをして一息ついていたら、見る見る霧が巻いてきて、これはまずいと思ったので急いで駆け下りました。下り

は雪のおかげで滑るように降りられました。

今回のお参りにあたっては、願いと問いを冠着山に聞いてもらいたくて登りました。

冠着山は、「生まれ清まりの山」「再生の山」と言われています。麓への帰り道、来る時に歩いた自分の足跡の隣りをまた歩きながら、「新しい命をいただいた」と感じつつ、悲しいことや苦しいこと、願い事や悩み事、リフレッシュして元気が欲しい、そんなそれぞれの想いに答えてくれるお山だと改めて感じました。

私自身は微力ですが、皆様と一緒に冠着山を愛し大切に行きたいと思っています。（登山中のほかの写真を4ページに掲載）





山頂の鳥居



天狗のブナ
雪で誰も近寄っ
ていなかったの
で独り占めしま
した



凍りついた不動滝
氷柱の中を清らかな水が落ちていました



児抱岩の岩肌にクライ
ミング用の金具が刺
さって痛々しい



雪に覆われた冠着十三仏から
児抱岩が見えました



「さらしなの地名力」一冊に
都人を千年に渡って魅了
してきた「さらしな」の地
名力を、シリーズで紹介し
ている「更級への旅」。「更
級日記」が国宝に指定さ
れたことについて書
いた265号までの全
号を、一冊にまとめま
した。

さらしな堂のサイ
トには過去号をすべ
てアップしています
が、見えていない方もお
り、めくってお気に入り
を見つけてもらって
、あらためて読んで思
いました。更級小学校、
佐良志奈神社、さらし
なの里友の会、戸倉図書館、
県立長野図書館に寄贈しま
した。資料館とさらしな堂
にもあります。
(芝原区・大谷善邦)



4月から宮澤久美の後任
でお世話になっている学芸
員の中村徳宏です。
今年、平成17年に旧更級
郡大岡村が長野市に編入さ
れ、古代から続いた「更級
郡」が行政区画から消滅し
て20年となります。

先史時代から現代にいた
るまで、豊かな自然と歴史
に恵まれた地域の魅力をよ
り多くの方々に知ってもら
うためにも「更級」の名前
が残るこの地で、館長はじ
め資料館スタッフや更級地
区、区、市、町、村の皆さ
らと一緒に盛り上げて行
きたいと考えておりま
す。

編集後記 冠着山仙石登山口の
赤松は、「山の神」と呼ぶにふ
さわしい見事な枝ぶりや幹回り
でした。薪取りなど山仕事を終
えた人たちが「冠着大学」を開
講する場でもありました。18号、
23号で詳しく紹介しています。
新しい樺の御神木の300年後、冠
着山、さらしなの里はどうなっ
ているか◆工藤修さんは、長野
市篠ノ井のお住まいで、修験道
の修行もしている方です。冠着
山には坊城平をはじめ修験道に
ちなんだ地名や痕跡がたくさん
残っています。クライミング用
の金具が打ち込まれた児抱岩の
痛々しさ、同感です。